

ユーモアの事例を「見だし」理論の観点から検討する試み

A study about “finding” theory of humor comprehension through humor cases

中村 太戯留^{† ‡}

Tagiru Nakamura

武蔵野大学{[†]データサイエンス学部, [‡]教養教育リサーチセンター}

{[†] Faculty of Data Science, [‡] Research Center for Liberal Education}, Musashino University

tagiru_n@musashino-u.ac.jp

概要

ユーモア理解においては、ヒトの生存と関連性のある事柄の見だしと、その事柄を見だしたヒトを保護するフレームの2つが重要であると、ユーモア理解の「見だし」理論では考えられている。優越理論、エネルギー理論、そして不調和解消理論などの他の理論で提案されてきた概念は、この2つに発展的に統合できる可能性が考えられる。本研究では、ユーモアの事例を参照しつつ、この2つの概念装置を用いた説明可能性について検討する。

キーワード：ユーモア、事例研究、見だし理論、関連性感知、保護フレーム

1. はじめに

ユーモア理解においては、ヒトの生存と関連性のある事柄の見だしと、その事柄を見だしたヒトを保護するフレームの2つが重要であると考えられている[12]。本研究ではこれを「ユーモア理解の見だし理論」、あるいは単に「見だし理論」と表現する。本研究では、ユーモアの事例を参照しつつ、その事例をこの2つの概念装置を用いて説明することを通して、見だし理論[12]の説明可能性を検討する。

2. ユーモア理解の見だし理論

ヒトの生存と関連性のある事柄の見だしに関して、見だし理論[12]では、「ある事柄が、自分の目標達成、自分の欲求実現、自分が有する幸福や属する種の幸福の維持に(ポジティブであれ、ネガティブであれ)有意な影響を及ぼすならば、それは関連性のある事柄である。」(p.311)[18]という定義を発展的に継承している。その神経基盤としては扁桃体が重要な役割を果たすことが示唆されている[11]。また、見だし理論[12]では関連性のある事柄の見だしをする対象として、言葉や行為に加えて、言葉を発するヒトや行為をするヒトも対象となりうることを、そしてそれらの対象に対して、何らかの間違ひの見だしや、何らかの新たな関係性を見だし、の二種類がユーモア理解においては関与する

ことを報告している。

その事柄を見だしたヒトを保護するフレームに関して、見だし理論[12]では、「興奮を求める状態では、危険な境界線に沿って、心理的な保護フレームがあると想定できる。(中略)保護フレームは、ヒトが死亡するのを防ぎ、ひとたび始動すると、たとえ空中にいて周りは危険でも、安全だとヒトは感じる。」(p.29)[1]という定義を発展的に継承している。その神経基盤としては側頭葉前部や尾状核や帯状回などが関与する可能性が報告されている[13]。また、保護フレームのカテゴリとして、自信フレーム、安全フレーム、そして分離フレームの3つがあり、さらに分離フレームは、自己代用、空想、そして追憶の3つの下位カテゴリに分類されると考えられている(p.77)[1]。

すなわち、「保護フレームが機能した状態で関連性を感知した時にユーモアが生じる」というのが見だし理論[12]の骨子である。なお、ユーモア理解をする本人としては、関連性を感知するまで、保護フレームが機能しているかどうかよくわからないという側面もあるため、「関連性を感知した時に保護フレームが機能しているならば、そしてその場合に限り、ユーモアが生じる」と記載したほうが適切かもしれない。

3. ユーモアに関する他の理論

ユーモアに関する代表的な理論としては、優越理論[7]、エネルギー理論[4][19]、そして不調和解消理論[20]を挙げることができるため、これらと見だし理論[12]の関係性や位置づけについて検討していきたい。

優越理論[7]は、他人や過去の自分の劣る側面を晒すことで、相対的に現在の自分が突然の栄誉を享受する、という要因を重視している。理論の名称としては、劣る側面を強調した場合には、非難理論、攻撃性理論、価値低下理論と呼ばれ、相対的な栄誉を強調した場合には優越理論と呼ばれてきた。本稿では、これらを優越理論として総称している。

このような劣る側面を晒すという事柄は、「自分の目標達成、自分の欲求実現、自分が有する幸福や属する種の幸福の維持に有意な影響を及ぼす」と考えられるため、(ネガティブな)関連性のある事柄と考えられる。一方、相対的な榮譽を享受するという事柄は、(ポジティブな)関連性のある事柄と考えられる。しかし、例えば、自分が晒した劣る側面から、晒した本人が保護されていなければ単なる危険な状態であり、ユーモアが生じることはないと考えられる。

すなわち、優越理論[7]は、見だし理論[12]における関連性の感知の具体例の一つであり、保護フレームの観点の追加が必要と考えられる。

エネルギー理論[4][19]は、性的ないし暴力的な余剰な神経エネルギーの放出という要因を重視している。

このような性的ないし暴力的な事柄は、「自分の目標達成、自分の欲求実現、自分が有する幸福や属する種の幸福の維持に有意な影響を及ぼす」と考えられるため、関連性のある事柄と考えられる。また、エネルギー理論が取り扱う性的ないし暴力的なエネルギー自体が関連性という概念と近い概念であるようにも見える。しかし、その見いだした性的ないし暴力的な事柄から、見いだした本人が保護されていなければ危険な状態であり、ユーモアが生じることはないと考えられる。

すなわち、エネルギー理論[4][19]も、見だし理論[12]における関連性の感知の具体例の一つであり、保護フレームの観点の追加が必要と考えられる。

不調和解消理論[20]は、ユーモア理解における段階的な処理を重視している。第一段階として、いつもと違う何か[3]やあいまいで不調和な何か[2]として不調和を感知する。第二段階として、そのギャップを埋める新たな関係性を見いだしたり[6][10]、思い込みの間違いを見いだしたり[8]して不調和を解消する。

しかし、不調和を解消すれば必ずユーモアが生じるわけではなく、見だし理論[12]と比較して、見いだした新たな関係性や思い込みの間違いが「関連性を有している」という観点と、見いだした際に保護フレームが機能しているという観点の追加が必要と考えられる。

なお、不調和解消理論のなかには、解消段階は不要とする主張[14][15]もあるが、言葉や行為に関する不調和解消ではなく、言葉を発するヒトや行為をするヒトに関する不調和解消をしていると解釈することで整理可能であることを付記する。例えば、語用論が扱う隠喩という現象は言葉に関する不調和解消が関与するのに対して、皮肉という現象は言葉を発するヒトに関する

不調和解消が関与することが知られている[5][21]。

不調和解消理論[20]に関する実証的な研究として、論理的な不調和と構造的な不調和は独立に関与することが報告されている[9]。論理的な不調和は、論理の欠如により生じる不調和のことで、論理の欠如があるとユーモアは弱くなることが報告されている。また、構造的な不調和は、知識や常識からの乖離による不調和のことで、知識や常識からの乖離があるとユーモアは強くなることが報告されている。

このような論理的な不調和があると、関連性の感知がしづらくなるために、ユーモアが生じにくくなると解釈することができる。一方、知識や常識は、ユーモアを理解するヒトにとって少なからず関連性のある事柄としてそのヒトの記憶にとどまっていると考えられるため、その内容からの乖離も関連性のある事柄であり、その不調和を解消して見いだした新たな関係性や思い込みの間違ひも関連性のある事柄になると解釈することができる。しかし、その見いだした関連性のある事柄から見いだしたヒトが保護されていなければユーモアは生じないと考えられるため、見だし理論[12]と比較して、見いだした際に保護フレームが機能しているという観点の追加がここでも必要と考えられる。

日本における漫才の対話に関する実証的な研究として、オープンコミュニケーションの関与が報告されている[16]。オープンコミュニケーションとは、「二者間の対話によって第三者であるユーザへ情報伝達を行うこと」(p.526)[16]と定義されている。二人の漫才師が対話しつつ、第三者にあたる観客に情報を伝達してユーモアを生じさせる話芸が漫才と解釈することができる。

漫才師の対話は観客にとって関連性のある事柄と想定することができる。そして、観客はあくまで第三者であり、漫才師が繰り広げる対話からは物理的に保護されているため、保護フレームのうちの安全フレームが機能していると考えられる。すなわち、見だし理論[12]は、漫才をオープンコミュニケーションとして捉える観点と整合すると考えられる。

すなわち、見だし理論[12]が重視する関連性に関しては、優越理論[7]やエネルギー理論[4][19]が主な対象としている性的ないし暴力的な事柄を抽象化した概念で、エネルギー理論が重視している神経的なエネルギー自体と近い概念であり、不調和解消理論[20]における不調和の解消結果として見いだす対象と捉えられるため、これまでに提案されている理論を統合的に整理する概念としては妥当なものであると考えられる。

また、見だし理論[12]が重視する保護フレームに関しては、優越理論[7]やエネルギー理論[4][19]や不調和解消理論[20]では扱われていない概念であり、これらを発展的に統合する際に重要なものであると考えられる。

4. ユーモア事例の検討

ユーモアの先行研究の事例を、見だし理論[12]が提案する関連性の感知と保護フレームという2つの概念装置を用いて説明可能かどうかを検討していきたい。

事例1 (p.90)[20] :

オライリーは強盗事件の裁判を受けた。
陪審員が「無罪」と告げると、オライリーは言った。
「素晴らしい！金は返さなくていいんだな？」

まず、オライリーはまだ法廷にいて拘束されているため、オライリーの発言を聞いているヒトの身はオライリーから保護されていて安全であると考えられる。すなわち、保護フレームのうちの安全フレームが機能していることが想定される。

あるいは、この事例をこの論文で読んでいるヒトであれば、あくまで空想の事例であり、オライリーに襲われる可能性はないと考えられる。このように解釈した場合であれば、保護フレームのうちの分離フレームの下位カテゴリの空想に該当すると考えられる。

そして、法的には無罪であるが、実際には有罪であるという事柄は、「自分が属する種の幸福の維持に有意な影響を及ぼす」(p.311)[18]と考えられるため、関連性のある事柄と考えることができる。

すなわち、見だし理論[12]の概念装置を用いることで、「保護フレームが機能した状態で関連性を感知したためにユーモアが生じた」と説明することができる。なお、この事柄に関連性を見いだすかどうかはヒトによるため、関連性を見いださないヒトはこの事例からはユーモアを生じないと考えられる。

この事例を優越理論[7]的に説明するならば、「自分が有罪であることを図らずも語ってしまったオライリーの知的に劣る側面を晒すことで、相対的に現在の自分が突然の栄誉を享受したためにユーモアが生じた」と説明することが想定される。あるいは、エネルギー理論[4][19]的に説明するならば、「普段はヒトを嘲笑するという社会的な暴力は抑圧され、余剰な神経エネルギーとして蓄積されているが、オライリーの知的に

劣る側面を嘲笑することでその余剰な神経エネルギーが放出されたためにユーモアが生じた」と説明することが想定される。どちらの説明も保護フレームの存在が暗黙の前提となっているが、ユーモアが生じる機序を説明するためには、見だし理論[12]が提案するように明示することが必要だと考えられる。

この事例を不調和解消理論[20]的に説明するならば、「陪審員の無罪という情報と、オライリーの発話から推測される有罪という情報との間に不調和を感知し、例えば法的に無罪なのであって実際に無罪というわけではないという解釈をすることで、その不調和を解消してユーモアが生じた」と説明することができる。この説明も、保護フレームの存在が暗黙の前提となっているのと、不調和を解消した結果は関連性のある事柄であることが暗黙の前提となっているが、ユーモアが生じる機序を説明するためには、見だし理論[12]が提案するように明示することが必要だと考えられる。

事例2 (p.100)[17] :

「ドクターは、家にいらっしゃいますか？」
気管支を患った患者は、ささやいた。
「いいえ」 医者若くてかわいらしい奥さんは
ささやき声で返事をした。「どうぞ、お入りください」

まず、この奥さんは自分の奥さんではないことから、保護フレームのうちの安全フレームが機能していることが想定される。仮に、自分がこのドクターだとしたら、安全フレームは機能しないと想定される。ただ、自分がこのドクターだとしても、この状況を打開する自信がある場合には、保護フレームのうちの自信フレームが機能することが想定される。一方で、自分がこのドクターだとして、自分と奥さんの関係は現実としてはもうだめだと悟り、そのストレスから逃れるために心だけ現実逃避的に精神的な世界へ逃れる場合には、保護フレームのうちの分離フレームの下位カテゴリの自己代用に該当すると考えられる。また、自分がこのドクターだとして、過去に奥さんがそのような状況であったが、現在はその状況が改善している場合には、保護フレームのうちの分離フレームの下位カテゴリの追憶に該当すると考えられる。そして、この事例をこの論文で読んでいるヒトであれば、あくまで空想の事例であり、自分に影響が及ぶことはないと考えられるため、保護フレームのうちの分離フレームの下位カテゴリの空想に該当すると考えられる。

そして、奥さんと間男の不倫という事柄は、「自分が属する種の幸福の維持に有意な影響を及ぼす」(p.311)[18]と考えられるため、関連性のある事柄と考えることができる。

すなわち、見だし理論[12]の概念装置を用いることで、「保護フレームが機能した状態で関連性を感知したためにユーモアが生じた」と説明することができる。

この事例を優越理論[7]的に説明するならば、「性的でモラルに反する事柄を晒すことで、相対的に現在の自分が突然の荣誉を享受したためにユーモアが生じた」と説明することが想定される。あるいは、エネルギー理論[4][19]的に説明するならば、「普段は性的な事柄は抑圧され、余剰な神経エネルギーとして蓄積されているが、性的な事柄を晒すことでその余剰な神経エネルギーが放出されたためにユーモアが生じた」と説明することが想定される。この事例を不調和解消理論[20]的に説明するならば、「患者という情報と、ドクターがいないのに奥さんが招き入れるという情報との間に不調和を感知し、例えば患者ではなくて間男が不倫しに来たという解釈をすることで、その不調和を解消してユーモアが生じた」と説明することができる。いずれの説明も、保護フレームの存在が暗黙の前提となっており、また不調和解消理論[20]の説明では、不調和を解消した結果は関連性のある事柄であることが暗黙の前提となっているが、ユーモアが生じる機序を説明するためには、見だし理論[12]が提案するように、これらを明示することが必要だと考えられる。

5. おわりに

以上から、ユーモア理解の見だし理論[12]が提案するヒトの生存と関連性のある事柄の見だしと、その事柄を見だしたヒトを保護するフレームの2つの概念が重要であり、優越理論[7]、エネルギー理論[4][19]、そして不調和解消理論[20]で提案されてきた概念は、この2つに発展的に統合できる可能性が示唆された。

謝辞 本研究は、JSPS 科研費 JP20K13034 の助成を受けた。ここに感謝の意を表す。

文献

- [1] Apter, M. J., (2007) "Danger: Our quest for excitement", Oxford: Oneworld.
- [2] Attardo, S., Hempelmann, C. F., & Di Maio, S., (2002) "Script oppositions and logical mechanisms: Modeling incongruities and their resolutions", *Humor*, Vol. 15, No. 1, pp. 3-46.
- [3] Forabosco, G., (1992) "Cognitive aspects of the humor process:

- The concept of incongruity", *Humor*, Vol. 5, No. 1, pp. 45-68.
- [4] Freud, S., (1905) "Der witz und seine beziehung zum unbewußten", Fischer TaschenbuchVerlag. (懸田克躬[訳], (1970) "機知: その無意識との関係", フロイト著作集, Vol. 4, pp. 237-421, 人文書院.)
- [5] 深谷昌弘, & 田中茂範, (1996) "コトバの意味づけ論: 日常言語の生の営み", 紀伊國屋書店. (Fukaya, M., & Tanaka, S., (1996) "A sense-making theory for real language activities", Tokyo: Kinokuniya.)
- [6] Hillson, T. R., & Martin, R. A., (1994) "What's so funny about that?: The domains-interaction approach as a model of incongruity and resolution in humor", *Motivation and Emotion*, Vol. 18, No. 1, pp. 1-29.
- [7] Hobbes, T., (1840) "Human nature". In W. Molesworth (Ed.), *The English works of Thomas Hobbes of malmesbury*, Vol. 4. London: Bohn.
- [8] Hurley, M. M., Dennett, D. C., & Adams, R. B., (2011) "Inside jokes: Using humor to reverse engineer the mind", Cambridge MA: The MIT Press. (片岡宏仁[訳], (2015) "ヒトはなぜ笑うのか", 勁草書房.)
- [9] 伊藤大幸, (2010) "ユーモアの生起過程における論理的不適合および構造的不適合の役割", *認知科学*, Vol. 17, No. 2, pp. 297-312.
- [10] Mio, J. S., & Graesser, A. C., (1991) "Humor, language, and metaphor", *Metaphor and symbolic activity*, Vol. 6, No. 2, pp. 87-102.
- [11] Nakamura, T., Matsui, T., Utsumi, A., Yamazaki, M., Makita, K., Harada, T., Tanabe, H. C., & Sadato, N., (2018) "The role of the amygdala in incongruity resolution: The case of humor comprehension", *Social neuroscience*, Vol. 13, No. 5, pp. 553-565.
- [12] 中村太戯留, (2022) "ユーモア理解の「見だし」理論", *語用論研究*, Vol. 23, pp. 34-50.
- [13] 中村太戯留, (2022) "ユーモア理解における「保護されている」という認識の枠組みの神経基盤に関するメタ分析", *日本認知科学会第39回大会予稿集*, pp. 420-423.
- [14] Nerhardt, G., (1970) "Humor and inclination to laugh: Emotional reactions to stimuli of different divergence from a range of expectancy", *Scandinavian journal of psychology*, Vol. 11, No. 3, 185-195.
- [15] Nerhardt, G., (1976) "Incongruity and funniness: Towards a new descriptive model", In A. J. Chapman & H. C. Foot (Eds.), *Humor and laughter: Theory, research, and applications* (pp. 55-62), London: John Wiley & Sons.
- [16] 岡本雅史, 大庭真人, 榎本美香, & 飯田仁, (2008) "対話型教示エージェントモデル構築に向けた漫才対話のマルチモーダル分析", *知能と情報*, Vol. 20, No. 4, pp. 526-539.
- [17] Raskin, V., (1985) "Semantic mechanisms of humor", Dordrecht: Reidel.
- [18] Sander, D., Grafman, J., & Zalla, T., (2003) "The human amygdala: An evolved system for relevance detection", *Reviews in the neurosciences*, Vol. 14, No. 4, pp. 303-316.
- [19] Spencer, H., (1859) "The physiology of laughter", *Macmillan's magazine*, Vol. 1, pp. 395-402.
- [20] Suls, J. M., (1972) "A two-stage model for the appreciation of jokes and cartoons: An information-processing analysis", In Goldstein, J. H., & McGhee, P. E. (Eds.), *The psychology of humor: Theoretical perspectives and empirical issues*, pp. 81-100, New York: Academic Press.
- [21] 田中茂範, & 深谷昌弘, (1998) "意味づけ論の展開: 情況編成・コトバ・会話", 紀伊國屋書店. (Tanaka, S., & Fukaya, M., (1998) "A continuation of sense-making theory: Sense-making", literal expression, and communication, Tokyo: Kinokuniya.)